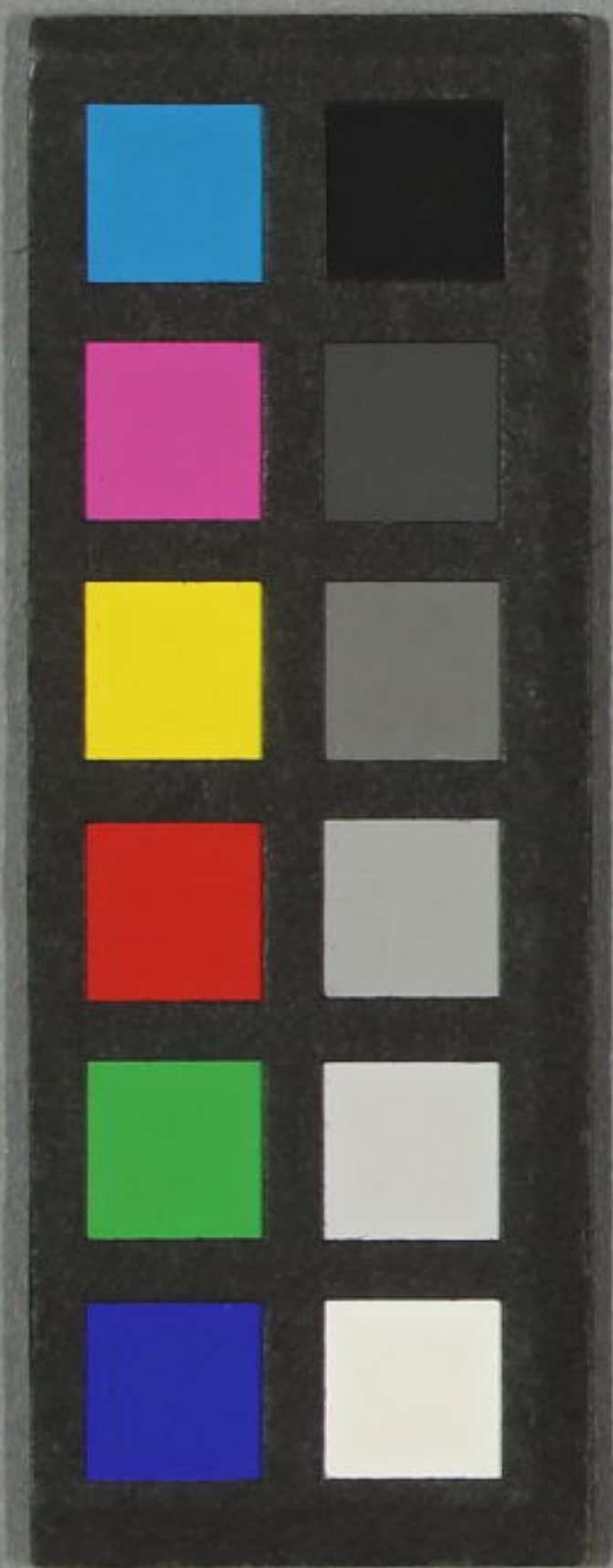


紹巴雜談集

5
4433



15
4433

門 へ 5
4433
巻

昭和九年
九月九日
購求

宗祇乃雜談云

上は此連歌と他人の作りよきうきう
下手のハ親類乃中あきうきうとヤ
なれし我れ松よ是と思ふよ

をを記しりりハ花を咲く人

花を咲く人乃揚るわく

とさ月風船よのけさわ田原

遠くよあはびと云花咲よ揚るわく

よ高根いほきもえんをれと親類よあ

らん又月のとるるわ田原とけさわ

まゝもんをなれとらうらわしうはり
なれと他人に中よれをわんとてさう
通載の難儀よ

中左様を致すもの証候よのまよはく
うさしと一や世のハまははくうさしと
乞願紙よのま

夕ぐれをうさしとてさう
月所一やはりうさしのま
あなれひりよ月れあうさ
ゆよれよさうさむとま月あれ

のおれはうさして候りんうさうのあ
うかりと候まうり月晴くさむん
まゆくさうさうあなうたうたれ
か一やまうらにうさうさうま
はくともあまのまうさゆく
うさしん基作有文をなま致すり
文うさうのまうさしとらわり思
通すらま

なまうさうらわうのま
まともな候候うのま

さうぢやいふは後傳の破れ物なり也

うけとてしきりしとてよめとてあはれ後傳の
まゝとてしきりしとてよめとてあはれ後傳の
らんさゆし又後傳の秘の事氣何よらん
うつとてしきりしとてよめとてあはれ後傳の
こそ心あはれなりとてよめとてあはれ後傳の
や又別は花のみからとてよめとてあはれ後傳の
なるめゆしとてよめとてあはれ後傳の
見わたすは花の秘の事氣何よらん
と後傳の秘の事氣何よらん

乃ら後之とてわやせ文新とてあはれ後傳の
かぶらうとてわやせ文新とてあはれ後傳の
よ云つとてわやせ文新とてあはれ後傳の
あはれとてわやせ文新とてあはれ後傳の

風も志のなまやせ文新とてあはれ後傳の

相も志のなまやせ文新とてあはれ後傳の

なるやとてわやせ文新とてあはれ後傳の
なるやとてわやせ文新とてあはれ後傳の
はらとてわやせ文新とてあはれ後傳の
はらとてわやせ文新とてあはれ後傳の

しくそあめれ

あかからんかみりくしせせ

あよそむせをほほ花れひらえ

けお城のこあさりと思えんさようむ世を

あしほいりれもあしおわいもあてあしり

といみとせとかんもせほと

人こそかきせうそりせれ

月やあぬこれ若れ秋のを

をよあるものま人もせうそるそむ

をちりよもあ一月ひりよそ若れ秋

よちうそぬびりれし秋きくまあうそ

ちくこあうそもてあうひららん也月であ

解ぬきやせりしもあてあうと回

秋城のそえみうあうま

花をちりきき葉はある山と風

おしめも花をあててくま葉は風れ

あま城かなく秋よあうそあ城葉もしを

らしめし思しあうて又ちりきとあし也

花をちりき葉を思しあう

一 中吉のとりよるこ先初のえん秋のしめ

のちよらうらむさきふとかくてうらあ世乃
新きまのいふまじりしてはくくてもふん
えんのまをさるわらとぢやくはま新
一はまのちま文紙うま理すまはま
たふんえまはま久しく無きも何ゆ
あふたのち座敷やまをてまをくこ
やふまぢやくくまらもすくこ又下るま
まをまはま久れ子まをまゆまはま
四ゆうしくそゆとまをなうこまを乃ま
あまらうまあるまはまくま理ま



うひまらうま久まは月とまん紙は久
まをく一山はれ樹とまんと樹のまをま
しく廻ううまありと月又まらまおな
まをく列のまをまをま世の風情まら
まをくくまら人多くまをまひまが
らんまをまぢやくはま
一或人ま紙まあひまく連歌すまま
いうまをまをまはまはまはまは
まをくてまらうまのら連歌はま
まをま一まをまはまはまはま

ち後をとりよみおく大切のりなり
あつらふよしあるてみはとこちり民
ゆさう治定れ字はくまやしは
よく見おれせくしそけれゆめ前
のうとほ大くみやあー我句と午に
結ましくすらのいよちりてとけれ
ともみ合くみきとてお透するも
まゝあんとまゝいえおれ二句とみ
下く極我句をみ合くおとくし
ねも極回同意のあやまりとあり

おんまておらひゆら
一或人字をよき歌のり尋れ一に
さましくれこのりあるくならき歌を
くまゝ一乃病人よ業はあつらうこと
にまゝいひよさくさう又さゝまゝ業
とあゝあや大業のり一とけれあてら
ならあももた業えらりあゝ人ゝはあ
るゝ一連歌もそのりよまゝのり
とせんと思ふもあつらせはありしん
よりくらよとあつらあつらとあん

やまのうらやまのうらやま

一中右も世分別くおぼる

梅や笑花の思も人々代の美

りしめいふあとはあからけあふ

ききよあつらひりまきあ

花をわやまらやかきん家た

手おき花よききよあつら

人よよら一帯もふほおき

志のめや月も釣る一はり

月れひりたきしらふよと

りてれらうらやまゆらえ

付句

いつともわりぬきれあつら

老野山あつら年れまき

らうはくも花のみよのまき

まきとくふか萩さける陰

まきあつらその月よき

廉のきも花の月よき

はらたきそとゆきあま

消やぬきおのふく釣きて

あしき人言れは中絶とあり

ほろあくも娘はさうの勢りきり

打とけて又さうれゆく中

ふら打とけさうをきく中

物くひおらんみちをさる風心

あはれ人さうあがりさうあつて

思ひけりかきりたるを老のまゝ

伊勢物語のまゝに物くひをさるる

しつひやせんをのありさうあはれ人の

縁とあはれそのまゝにはさうさう

一るさうさうさうさうさうさう

同めさうはまはあつてさうさうさう

やうけらさうあはれかたさうさう

とありはさう内親王のまゝさうさう

黒平女さうまとおひらさうさう

源はさうさうはさうは車人のまゝ

の奇也は内親王のまゝさうさう

さうはさうたまさうさうさうさう

さうはさうままさうさうさうさう

さうはさうさうさうさうさうさう

初斗しとらりてくちりてをハ川草人歌
考の才をねとちるはけつやらうと
とせらりちるはたふもあふふはを母
限すすくもやゆらん

切とめつてふ月此の末

耶の信おくり此乃をきさう

新方にはとをを此乃信て

新在介此乃よ遠さるを井此乃の

きりてえくすもつて美耶故江乃

月とあまは詞をよ下よはさういふ

けりめくちりて回らぬも

又回りのよまをよすくみなる

いまうきくたはれ此乃ありを

川らうて秋方よまをりいすは

月あたるこのかろはよとけて

とらやまをよす

此一表ハは能記巴白業白判一字

遠す書写也能記連歌のら物り

るくといふのま歌よ遠す

りといふいふをよま歌にら

此本 寛文十集より一は はんのなをいふ
とやめられぬ

二十時 寛文六丙 歳三月 吉日

大坂 佐西村氏

吉村



